



企画展

「生誕100年記念“自由”を生きる画家 深沢史朗展」

人と人が出会い、交流をするとき、そこには必ず何らかの関係が生じます。そのとらえ方は状況と立場によってずいぶん変化するものです。

前回からご紹介している当町出身の画家、深沢史朗ふかさわ しろうは、晩年にオブジェ（立体作品）を多く創るようになります。史朗が亡くなる年に制作した作品をご覧ください。

真っ赤な箱の中央、緑のハイヒールが檻のなかに閉じこめられています。作品名の「engagement」は「婚約」という意味。閉じこめられたハイヒールは、婚約によって自由気ままにふるまうことができなくなった女性を暗示しているのです。彼女を束縛そくばくしているのは、婚約者？家庭？それとも世間の目？…しかし深刻さは感じられません。目にまぶしいほどの赤、青、黄色、緑。この明るい色彩は新しい生活への期待でしょうか。彼女にとっては、閉じこめられたことさえも喜びなのかもしれません。人生の晴れ舞台のひとつである「婚約」を、



深沢史朗「engagement」ペンキ、靴、棒、板
1978年制作 栃木県立美術館所蔵

ちょっと皮肉ひにくをきかせた目線でユーモアたっぷりに捉とらえた作品です。

※本作品は2月4日（日）まで開催の企画展「生誕100年記念“自由”を生きる画家 深沢史朗展」後期に出品されています。

那珂川町馬頭広重美術館 学芸員 津田 卓子

「福寿草群生地」

自然の福寿草の群生地が広がる大山田下郷の高野喜一さん宅。「自己流だけど、カメラはフィルムがいいね」と話してくれました。

なお、見ごろのピークは2月中旬です。



ミニ ギャラリー

「福寿草」

